

式 辞

厳しい冬を乗り越え、春の息吹が感じられるこの良き日に、保護者の皆様のご臨席を賜り、令和四年度（二〇二二年度）第一四八回豊中市立新田小学校の卒業式を挙げてきますことを、心より御礼申しあげます。

本日、ここに一三二名が、六年間の前期義務教育を終え、素晴らしい卒業の日を迎えました。

六年生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。心からお祝い申しあげます。

皆さんが入学してから本日の卒業式までの間、皆さんの成長を願って「新田版学習の四本柱」を中心にお話をしてきました。

それは、「皆さんが未来社会という未知の世界でも、なりたい自分になる術」^{ナベ}を伝えたかったからです。

今日は皆さんに「ドーハの歓喜」^{かんき}と呼ばれたワールドカップ日本代表チームの成長を「新田版学習の四本柱」^{たど}で辿ってみたいと思います。

日本のサッカーチームは、半世紀ほど前のメキシコオリンピックで銅メダルに輝きました。その後、長い間、低迷が続き世界のサッカー界から取り残されました。関係者は、世界に通

用するチームを作るために、何をどうすればよいのか考え続けました。

一九九二年、協会の人々はサッカーの実践的理論を熟知しているオランダのハンス・オフトさんに監督をお願いしました。オフト監督は「スモールフィールド・アイコンタクト・トライアングル・スリーライン」などを指導しました。

その指導は、選手たちが考え、気づくことを大切にしましたのでした。

まさに「Learning to know」そのものです。学び方を学ばせました。「Learning to know」を身に付けた選手から新しい戦術が生まれ、チーム力が高まりました。

この「Learning to know」は、メキシコオリンピックで銅メダルを獲得した日本選手の言葉「教えられる姿勢よりも、学ぶうとする心構えの方が大きな効果がある」につながる重要なことです。

一九九四年、ワールドカップ初出場の夢があと一歩で叶うところまで日本チームは成長しました。しかし、皆さんも各種の報道で知っていると思いますが、夢が叶う寸前で「ドーハの悲劇」が起こってしまいました。この教訓を生かす新たな取り組みや、次の強化策が検討されました。

これまでのサッカーを振り返り、「何が足りなかったのか、何が課題なのか、また何をなすべきか」を検討しました。これは、皆さんが「成りたい自分」を目指して、自分の言動を振り返り、新たな課題に挑戦している姿とまったく同じで

す。代表チームは「為す事を学ぶ」、「Learning to do」の課題に挑んだのです。

その課題は「コミュニケーション能力の強化」でした。

皆さんは、昨年十二月一日、スペイン戦での「奇跡の一ミリのことを覚えていますか？ 三苫選手が、ゴールラインを越えそうになるボールをぎりぎりぎりまで切り返し、勝ち越し点に繋げました。

勝越しゴールを決めた田中選手は「三苫選手なら最後まで諦めずにボールを追いかける、そして自分に繋いでくれるはず、シュートが打てるポジションには、はやく行こう」という信頼に基づいた状況判断をしたのだと思います。

一方、三苫選手も「ここでクロスボールをあげれば、田中選手はシュートを放つ位置に、必ず走っているはずだ」という信頼に基づいた確信を持っていたと思います。

「Learning to do」で培ったのは「信頼感」でした。この信頼感があつたからこそ、フランスの名選手の言葉「ベストのタイミングでベストの場所にいる」ことが実践できたのです。

「Learning to do」によりコミュニケーション能力を高めたことで、選手同士がお互いの良さを見つけ、尊敬しあう信頼関係が生まれました。

選手同士が信頼し合う日本チームは、試合に出場している選手とベンチスタートの選手たちの心が一つになっていまし

た。登録選手二十六人全員が「Learning to live together」の塊かたまりになっていました。

ドイツ戦は、後半ピッチに立った堂安選手が、その四分後に同点ゴールを、また、スペイン戦でも後半開始から出場し、その三分後に同点ゴールを放ちました。

こんな離れ業をした堂安選手どうあんはベンチスタートでしたが、心の中は「Learning to live together」で一杯だったと思います。出場している十一人の選手とともに、心の中ではドイツやスペインの選手と競い合っていたのです。

だから途中から試合に参加しても、出場していた選手と同じように、心と体が動き同点ゴールを決められたのだと思います。

日本の代表チームの監督もしたブラジルの名選手は「チームにとって個人の能力は大切である。しかし、それ以上に勝敗を分けるのはチームワークだ」という言葉を残しています。まさに「Learning to live together」です。

次に「Learning to be」について話します。

日本がいたグループEは、過去に優勝経験のある強豪国ドイツやスペイン、そしてコスタリカで構成されていました。このグループEから決勝トーナメントへの進出は難しいかなという不安を持ちました。

初戦のドイツ戦に勝ち、不安が大きな期待に変わりました。ところが、コスタリカ戦で敗れ、スペイン戦のことを考えると期待が落胆に変わりました。

しかし、ここで代表チームは底力を発揮したのでです。その底力は「Learning to be」から生まれました。選手たちは自分たちのサッカーを振り返りました。

選手たちの「Learning to be」は、成りたかつたチーム像です。そして「自分たちの強み」は、「どんな状況に置かれても気後れせず、臆することなく、自分たちを信じ合い全力を尽くす」ことだと思ひ起こし、全力でプレーをしました。

スペインのある有名選手は困ったとき、「人間は困難に直面するまで、自分の持つ強さに気付かないものだ」と自分に言い聞かせたそうです。

ドイツ戦やスペイン戦での勝利は、世界の人々を驚かせましたが、代表チームはベスト十六で終わりました。しかし、近い将来その壁を突破する日が来るだろうと私は、信じています。

皆さんが、皆さんの夢や希望を実現する過程には、様々な高い壁が待ち構えています。

しかし、皆さんはこの六年間で、問題解決に向かう自分なりの「学習の四本柱」を身に付けています。今後、困難な状況に置かれたとしても自分のこれまでの努力に自信を持ち、新たな工夫を考え「成りたい自分」に近づいてください。

夢や希望は、諦めない限り近づけます。皆さん一人一人が、「未来という未知の世界でも、自分を信じて、臆することなく夢や希望に向かってくれる」と信じています。

最後になりましたが、保護者の皆様、お子様のご卒業おめでとうございます。心より本日の良き日をお祝いたしますとともに、この六年間の皆様の「ご苦勞に改めて敬意を表する次第でございます。

私たち教職員一同は、子どもたち一人一人が、この六年間、この新田小学校で学び続けた「新田版の学習の四本柱」をもとに、未来社会に大きく羽ばたいてくれると信じています。

どうぞ、これから成長をしっかりと見守りながら、子どもたちの持つ力を信じて、子どもたちの自立を応援していただきますよう、重ねてお願い申し上げます。

以上をもちまして私のお祝いの言葉といたします。

令和五年（二〇二三年）三月十七日

豊中市立新田小学校 校長

安家 紀子